

| **2017.11.17**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

大の猫好きなもの、林勇気さんから「今回は猫にしようかと」と展覧会の構想を告げられた時は驚きつつ喜んだ(もちろん単純な「猫展」にはならないだろうと想像がついてはいたけれど)。今これを読んでいる人の中にはDMの猫(出典はフリーの画像素材だ)の愛らしさに惹きつけられて入って来られた猫好きたちも多いのではないか。さて、肝心の「猫」がいかほどのものであるかは、今日から始まる展示を見て確かめていただくこととして、「猫」に関することなら何を書いてもOKということなので、いきなり閑話休題。最近巷では「しっぽつきクッション」なるものが流行っているらしい。丸型のクッションに、猫の尻尾のような突起がついているだけの、「Q」みたいな形のクッションなのだが、中にセンサーが入っているようで、表面を撫でるとその「尻尾」が動くのだ。売り出し文句は「心を癒す、しっぽクッション」(「Qoobo」http://qoobo.info)。顔も描かれてないただの丸クッションなので、それが尻尾を動かしているさまは結構グロテスクである。実際に海外からの反響は「エイリアン」のよう、だそうだ。空前の「猫ブーム」もここまで来たか…と、初めて見たときは少々呆れていたが、「可愛い」「癒される」と、今かなりの人気商品らしい。うーん、可愛いと言われればちょっと愛らしいかもしれない。一人暮らしのマンションで猫は飼えないけど、クッションなら、という気持ちはわからなくもない。さて、それでは私はこの「Q」型クッションを「猫」らしきものとして愛せるだろうか？と考えていたら、「私」は一体どこで「猫」と「猫でないもの」を区別しているのだろうか、という、本展の問題提起に行き着く。ここから先は来場される方の反応を見つつ、考えていきたいと思う。ところで、このしっぽつきクッションの詳細を見ていると、カバーは取り外して洗えるらしい。「愛猫」らしきもののカバーを外すとき、私は一体どういう感覚になるのだろうか。

| **2017.11.17**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

先日にEXPOCITYに行った際、林展初日の本日に1歳になった子供がペットショップでコロコロと遊んでいる子犬を見て目を見張り、声をあげて喜んでいた。しかし、その隣のコーナーの子猫を見た途端、それと比べものにならないほどに狂喜した。一説には哺乳類は遺伝子コードの中に、『手足が短く、目の大きな記号を持つ生き物を「子」として認識し、守るべき対象とする』が働くという。大人の目から見ると、子犬も子猫も小さく、飛び跳ねるように動き回り、予測不能の動きをする点で「大体同じ」に見えてしまう。その理由がDNAの基本プログラムの所以なのか、記号性や認識のキャッシュによるものなのかはわからないが、まだハードとソフトが起動して間も無い存在に、その名前も知らないふたつの生き物は、あたりまえに違うものなのだろう。

| **2017.11.17**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

16日の夜に室町通に面したギャラリー入り口扉部分に、本展DMにも使用している猫のグラフィックを設置した。作業はイメージの中で横たわる猫の画像を三分割した

シールプリントを、左から順に貼っていくものだったが、そこに通りかかったご婦人が興味を持ち、話しかけてこられた。「猫の下半身が切れていてかわいそう」と。

| **2017.11.18**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

そういえば昔、「猫バスの定期点検」というイラストを見たことを思い出した。その絵の中では「カバー」が外され、中身が見えていた。

| **2017.11.18**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

VRゴーグルをかけて林作品を鑑賞(体験)している人を外から見る時、大きなヘッドマウントを装着した姿は、映画やアニメなどで見る「近未来」の姿と同一なのだが、それが突如として目の前に広がる様子に戸惑いを覚える。また、VRゴーグルを装着しながら、誰かと会話をする感覚はこれまでのどのような経験にも置きかわりにくいと感じる。VRからの視界には自らの姿だけでなく、対話の相手の姿も不在であり、それは夢の中の会話のようで、神々の対話のような、別々の独り言のようなものように思える。いずれにせよVRを装着している私たちの姿も作品の一部である。そういえばVRゴーグルの作品にも、DMに使用している猫の「画像」はあるそうだ。VR空間内のどこかに。

| **2017.11.18**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

1歳半の我が子が少しづつ言葉を覚え、発するようになってきた。そんな中、もっばら早くに発した言葉が「ワンワン」である。散歩中の犬や絵本の中に登場する犬を見ると、「ワンワン」と指差して教えてくれるのだ。しかし、例えば、テレビに出てくる猫やペットショップの猫に対しても「ワンワン」というので、「これは“ニャアニャア”だよ。」と教えるも、なかなか理解してもらえない。確かに、犬と猫は似ているかもしれない。形状や質感、大きさ、人間との関わり方は似ていると言えは似ている。子どもにとっての情報や体験を更新できる場(犬や猫との遭遇率)も同じくらいであろう。ただ、「ワンワン」とは鳴かないはずだ。未だ、我が子の猫に対する認識は「ワンワン」のままなのだが、この先、猫を猫として認識する日はきっと訪れる。それがどんな瞬間で、どのような発見で、何を感じるのか、かなり興味深いものである。

| **2017.11.18**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

林勇気は2Fの展示作品《Chimera》のアニメーションを制作する過程で、個々に動きを当てる際、「LINEスタンプ」を少しイメージしたとのこと。思えば「LINE」はスタンプ機能によって大きく普及したような記憶がある。「スタンプ」は、言葉と写真だけでは伝えきれない、おもにニュアンスを伝えるものとして機能していると思うが、言い換えれば「誤読(エラー)を含む曖昧さ」によるコミュニケーションを成立させているということ。曖昧だからこそイメージ(図像)は、個々にとって最適化されたイメージ(言葉)としてやり取りされるのだろう。ではAIは「曖昧さを回避」しながら、この「曖昧さ」をどう取り扱っていくのだろうか。

| **2017.11.19**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

猫の鳴き声は「にゃー」じゃなくて「わー」。 ガラにもなくネコのピアスを買ってしまった。 彼は近所の猫を「おかあさん」と呼んでいる。 法事にて、従兄弟のアイチが一人暮らしを始めて、職場から捨て猫をもらって飼っていると話題になった。とても意外だったので、帰ってから彼にメールしてみた。「猫飼ってるらしいやん」「うん。サクラとラブ」。バイト先の飲食店にて、隣の飲食店のゴミ箱から鳴き声がするので見に行くと子猫だった。保護して看病を続け、今ではすっかり店主の家族になった。 駐輪場の異臭騒ぎ。臭いの元を辿ると猫が死んでいた。ビルの管理をしているおじいさんがゴム手袋をして両手で持ち上げると内臓が腐敗していて崩壊した。飲食店の屋根裏で猫が死んで異臭がするというのがけっこうあるらしい。

| **2017.11.19**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

普段、私が猫に接するのは自宅の斜め向かいの家の飼っている黒猫だけです。勝手にクロちゃんと呼んでいます。ですが、近所のご老人もクロちゃんと呼んでいるのをききました。もしかしたら飼い主もそう呼んでいるかもしれません。クロちゃんは人懐っこいけれど、とても計算高い猫のように見えます。殆ど放し飼いの状態なのですが、通りがかる人々に愛想を振りまいてたくさん撫でてもらっています。同じ家に大型犬(とても大きい)がいるのですが、クロちゃんはその犬の事を下に見ているように思えてなりません。クロちゃんが撫でてもらっていると犬は不機嫌になり大きな声で吠えています。クロちゃんは興味がなさそうにしています。犬といえばSONYから発売されたAIを搭載した新型の犬型ペットロボットaiboは、経験した事をネットワークを介してクラウドに保存してaibo同士で共有して成長していくそうです。これまで見たSF映画や、身体と精神について考えさせられる商品だと思いました。しかし、同時に現状の私たちとどれほどの差があるのか、という事も考えました。何かあればgoogle、google MAP、youtubeにアクセスです。インデックス化された他者の経験や記憶(フィクションと混ざりながら)を擬似的に追体験しているように思います。同時にaiboはなぜ猫でなく、犬になったのか、という事も考えていました。答えは分からないままなのですが、猫型のロボットといえばドラえもんがいます。彼は感情的で人間味に溢れていて、時に未来の道具を使い、人に寄り添い共に経験を積み成長していきます。そう遠くない未来にドラえもんを再現しようとするプロジェクトが立ち上がる予感がします。「ほくドラえもん」という言葉がリアルに響くのでしょうか。

| **2017.11.19**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

前の住人が置いていった洗濯機はわりと新しくて使えそうやけど糸くずネットは猫でも洗ったんかと思うくらいパンパンなので新品と取り替えないとイケない。

| **2017.11.19**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

《times -cat》は、DMに使用している猫の画像を80×105＝8400のマス目に区切り、その1マスごとの色

に対応する文字コード(3桁×3列の数字)に置換して並べたもの。デジタルにおいて私たちは文字コードを色(光)に置き換えて、そこに画像を見ている。つまり揭示された紙の上には「デジタル側」から見たいわば情報の猫がいることになる。それは全く異なる視覚・認識のように思えるのだが、この作品には私たち「も」猫の姿がうっすらと見え、デジタルとアナログの共通体験としての「見る」が目の前にシレッとあることに少し不気味な気持ちになる。

| **2017.11.19**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

私は猫派でも犬派でもない。猫派の方々はどうな猫体験を積んでこられたのだろうか。そして猫派を猫中毒とは言い換えられないものだろうか。

| **2017.11.19**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

Gallery PARCは先月、三条御幸町から室町六角に移転したばかり。移動距離にして860mくらいで、街の野良猫の行動範囲が500～800mくらいと言われていることから、ギリギリ同じテリトリー内の移動といったイメージでしょうか。移転のご案内は郵送の他、HPとSNSで発信し、展覧会情報を掲載いただいているウェブサイトへの登録情報も変更してきた。しかし「Gallery PARC」とGoogleで検索した時に出てくるGoogleマップ上の情報はまだ変更できていなかったので本日着手することに。といっても作業はとても簡単で、検索すると「情報の修正を提案」というボタンがあり、そこから新しい住所などを入力することができた。すると情報修正を始める前にGoogleアカウントへのログインが求められ、そこで確認されたメールアドレスに次のようなメールが届いた。『編集内容の審査を開始いたしました。「PARC」の情報をお寄せいただき、ありがとうございました。変更内容が公開されましたら、ご連絡いたします。変更のステータスは [自分の投稿] で確認できます。現在 Google で投稿内容を確認しています。ぜひローカルガイド プログラムに参加して、マップへの投稿で特典を獲得しましょう。今後ともよろしく願いたします。Google マップ チーム』と。現在、PARCはGoogle上では新しい住所と共に「編集内容を審査しています」と表示されている。「Googleマップチーム」さんが人だとしたら本当に手間だろうなと思う。プログラムが審査してくれるのであれば、いったいどのような方式で審査されるのだろうか。Web上のGallery PARCが無事に移転できることを祈っている。

| **2017.11.21**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

餌をねだられ噛まれた上に侵入され待ち伏せされてます。猫は私を餌として認識しています。

| **2017.11.22**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

海外からのお客さんが、3階の展示作品《times -cat》を見て、「チェシャ猫」と言った。チェシャ猫はルイス・キャロルの小説『不思議の国のアリス』(1865年)に登場する架空の存在で、ニヤニヤとした笑顔を浮かべ、人の言葉話し、自分の身体を自由に消したりし出現させたりする。《times -cat》は、猫の姿が見えたり見えなかったり

するし、デジタル(文字コード)の中に「イメージ」が現れている点で、確かにチェシャ猫でもあると思える(見える)が、そこにニヤニヤとした表情までは見えない。それは育った国や記憶の違いなのでしょうか。

| **2017.11.23**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

『寝子根子値個音孤嶺弧』などとデタラメな漢字で「ねこ」と入力すると、たちまち私のPC環境では「ねこ」＝「猫」以外の「ねこ」が立ち上がる。『子子子子子子子子子子子』(猫の子 子猫 獅子の子 子獅子)は、平安時代から伝わる言葉遊びだと言われているが、AIがこうした言葉遊びを始めた時、人間は解読することができるだろうか。

| **2017.11.24**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

ある専門家によると、猫は人間のことを「動きの鈍重な、大きな猫」だと認識しているらしい。そんなことを友人に話すと、「ちがうよ。『温かい棒』としか思ってないよ。」と返された。僕は、どちらも正しいような気がした。

| **2017.11.25**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

先日「Schwarze Katz」というドイツワインを飲みました。「Schwarze Katz」はドイツ語で黒猫という意味です。英語で猫はCからはじまりますが、ドイツ語ではKからはじまります。言葉の響きは似ています。黒猫のイメージに反して甘いワインでした。展覧会の最終日にギャラリーにボトルを持参したいと考えています。寒いからクロちゃんには暫く会っていません。そうすると存在が曖昧になりぼやけてくるように思います。

| **2017.11.28**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

帰り際、家へ続く路地に入る時、表通りの家の前に置かれた段ボールの箱がちらりと見えた。外に向いて置かれているように見えたその箱の中身は「どうぞご自由にお持ち帰りください」とされたリサイクル用品のような気がしたが、家に入って用事を済ませている間、箱の中身のことが気になって仕方なくなってきた。そしてどこかで「猫かもしれない」という気が強くなっていった。あとでその箱を確認しにいったみたが、もう箱は無くなっていた。

| **2017.11.28**
| ⅢⅢⅢⅢⅢ

記憶の中の猫。猫といえは思い出す事があります。随分と以前に大阪で同棲していた友人の家に遊びにいった時の話です。彼らはとても臆病な猫を飼っていました。オレンジ色の照明の中で夕食をご馳走になって、食後にお酒を呑みながら話をしていたのですが、一方で私は床に落ちていた猫じゅらしのような玩具で猫と遊んでいたら、途中からひどく猫が興奮してしまいました。暫くすると遊び疲れたのか私の膝の上で眠りはじめました。普段は客には懐かずそういった事をしないので彼らはとても驚いていました。私自身も動物を膝の上で眠らせたのは初めての経験で、膝の上の温もりは今も覚えています。彼は暫くヒモのような生活をしていていましたが、2人は別れてしまいました。彼とはまだ友人で2年に1度ほど会います。彼女とも仲良くしていたのですが会わなくなりまし

